

## 程度副詞を分類する視点の考察

## Study Regarding Perspectives on Classifying Expressions of Degree

川端元子<sup>†</sup>

Motoko Kawabata

**Abstract** Degree adverbs have both objective and subjective aspects; there are some adverbs to explain the condition or state of the object and others to express how the speaking subject perceives the object. Such a two-sided nature makes it more difficult to set the perspective so as to understand the functions and nature of degree adverbs. After all, classification for detailed understanding of degree adverbs has become too complicated, and their functions and nature have remained elusive. More specifically, no previous studies have clearly explained how to segment the functions of expressions of degree, including degree adverbs and their surrounding phrases.

Therefore, this paper discusses from what perspective the functions and nature of degree adverbs should be perceived. Specifically, we reviewed previous studies concerning the classification of degree adverbs and the concept of degree to organize concepts of degree evaluation based on the diversity of degree scales. As a result, we discovered that the key to degree evaluation is the concept of sharing information through communication, and we introduced the idea of building a new framework for analysis based on this concept.

## 1. 程度修飾の持つ問題点

程度副詞というカテゴリーはその境界線を確定するのが難しい。その理由は程度副詞の限定する「程度性」や「程度修飾する」ということ自体が広範であることと関係している。ひとくちに「程度性を持つ」といっても量、頻度、状態の成立の度合い等々、程度性の種類はさまざまであり、その意味を持つ動詞や相対性名詞、形容詞や副詞など程度副詞が修飾する対象も幅広い。しかしながら、たとえば量をとりあげてみても、動作量、個体量、状態の変化量とさまざまであり、すべての程度副詞がこれらを網羅的に修飾するわけではない。これらとの修飾―被修飾の関係を整理することによって、程度副詞の特性を示す方法がこれまで行われてきた。そして、程度副詞にはどのような種類やタイプの程度をも修飾することのできるものから、特定の程度を修飾する場合に用いられるものまでが存在することが確認されてきた。

一般的で典型的とされる程度副詞とは、「大きい」「高い」などの相対的な状態性をもつ形容詞を修飾してその形容詞の表す状態性の程度を限定できるものである。たとえば、「かなり」「とても」「少し」などであり、「たくさん食べる」「大いに笑う」「ほぼ完成する」「たびたび来る」といった、主として動作に注目する「量の副詞」「概括量の副詞」「頻度の副詞」と区別される。これを踏まえ、従来の程度副詞研究において文法現象を扱う場合には、いわゆる「典型的な」程度副詞がその研究の対象とされ、程度副詞のより中心的な意味や機能について研究が進められてきた。

一方で、程度副詞の基本的な機能を捉えるために、他の様態や結果状態を表す副詞などとは異なる側面を探ることが行われてきた。たとえば、命令・依頼文や発話主体の意志・決意を表す形式と共起しにくいといった文末形式と共起制限を持つことの指摘などがそれである。このような程度副詞グループ内の相違点は、程度副詞の性質の精緻化における妨げともなってきた。

本稿では、このような程度副詞の多様性を再考するた

---

川端元子<sup>†</sup> 愛知工業大学 基礎教育センター(豊田市)

めに程度性の概念と程度評価スケールについて整理し、程度副詞の分類を行う上での視点の提示を試みる。

## 2. 程度性述語の種類と特徴

### 2・1 程度修飾を受けることのできる語句一段階語

程度副詞は一般に相対的な状態性の意味をもつ語句を修飾してその程度性を限定する副詞であるとされる。では、その「相対的な状態性の意味をもつ語句」(程度性述語)とは具体的にはどのようなものか。

程度副詞が修飾する語句の例として、例えば「おもしろい」を想定する。すると、「おもしろい」状態の無数の段階が「おもしろい」の極小値から極大値に向かってアナログ式に並んで一種の程度スケールをなしている状態が想定できる(中山恵利子 1996<sup>1)</sup>、川端元子 1999<sup>2)</sup>)。このような程度性述語としてまずあげられるのが形容詞であるが、程度副詞はほかに情態副詞や動詞、名詞なども修飾できる。

品詞にかかわらず、程度修飾を受けることのできる語句は、ライオンズ(Lyons1971)<sup>3)</sup>が段階語として示すものである。段階語とは、対象となる事態に対して単に属性づけするものではなく、対象となる事態の状態のあり方について、程度の小さい状態から大きい状態まで段階的に増大していく一種の程度性スケールを想定できるタイプの語句である。日本語「おもしろい」もこれに当たる。一方、非段階語は語句の意味の中に相対的な状態性を内在していない。段階語は対になる意味を持つ「高い／低い」を考えたとき、一方(高い)の否定形式(高くない)が他方(低い)の意味を包含し( $\sim X \supset Y$ )、一方(高い)が他方(低い)の否定形式(低くない)を包含しない( $Y \not\subset \sim X$ )関係にある組み合わせにある。そして、語句の組み合わせを対極反意語という。非段階語の場合は *dead* と *alive* のように、 $\sim X = Y$ 、 $X = \sim Y$  の関係を満たす。このような語句の組み合わせを相補反意語という。対極反意語は程度修飾を受けることが可能である(Sapir1944<sup>4)</sup>、Crues1986<sup>5)</sup>、Lyons1977、Kennedy2001<sup>6)</sup>、八木 1987<sup>7)</sup>)。なお、文脈によって段階語にも非段階語にも程度修飾が可能な程度副詞もある。

### 2・2 サピア(sapir1944)の提示する grading の種類

サピア(sapir1944)では、ある語句のあらわす状態の程度が小さいものから大きいものへと並んで段階を作るようすをスケールで表し、スケール上に示されたある状態の程度の大きさについてのあらわし方を *grading* とした。すなわち、相対的な状態性の意味に関する程度評価(尺度のあり方)といえる。サピアは実際に対象の状態

の程度性をはかるという場面において、論理的な程度評価(logical grading)、心理的な程度評価(psychological grading)言語的な程度評価(linguistic grading)という三側面が存在するとしている。

#### 2・1・1 Logical grading

論理的な程度評価は、程度を評価するに当たって基準をどのように設定するのかという問題と切り離すことができない。それは、その対象の状態の程度として一般常識的な基準をもとにしたものと、具体的な比較対象を基準にしたものという二種類の程度評価を含むからである。このような程度評価では、基準が具体的な対象であれ、一般常識的に想定されるものであれ、スケール上の任意の二点を比較した相対評価である。このとき、その評価は基準に対して当該の対象の状態の程度は「大きい」「より大きい」「小さい」「より小さい」といった語句によってその関係が表される。ただし、その際の「大きい・小さい」やある場所への距離(遠さ)を考える際の「遠い(far)・近い(near)」といった語句の意味はあくまで状態の関係を表すものであって、単独で用いられるときに帯びる肯定性や否定性を表さないし、状態に対する実質的な形容(属性表示)としての反意語として機能していない。特に、具体的に比較対象がある場合には、基準とは関係なく相互の関係にのみ言及することになる。すなわち、「こちらの部屋に人が多く、あちらの部屋に少ない」といったときに、「多い(many)」の一般常識的なレベルを必ずしも表すわけではない。

#### 2・1・2 Psychological grading

心理的な程度評価とは、ある事態の状態について対極反意語を用いて程度評価しようとするときの心的プロセスを表す。ライオンズ(Lyons1971)が述べる段階語の程度性スケールとは、たとえば、「small-big」のような対を成す形容詞の場合、一方向に向かえば「big」の程度が次第に大きくなり、逆方向に向かえば「small」の程度が次第に大きくなるような双方向性のスケールである。そして、スケール上の任意の  $XY$  について、一方の位置を基準にして、どちらの方向に向かって程度の大きさの関係を表しても、その実質的な関係に変わりがないものである。

サピア(sapir1944)では、これが用法上の制約や反意語の性質からいくつかのタイプに分類されている。一つは、対になる語の意味の関係に区分点や境界域がない場合であり、二つ目は、対になる語による双方向性スケールの中間領域が存在するものである。青さから黄色さへの色の変化を表す程度スケールを想定し、青さと黄色さ

のどちらの程度が高いかをはかるときに、中ほどに両方の性質を持つ緑の領域が存在することを想定すればわかりやすい。三つ目は中間領域として「どちらでもない」という領域が存在するものである。以上の3つは基本的には、スケール上の任意の点を起点としてどちらの方向に程度をはかっても、実質的な程度の大小関係が変わることはない。

この関係におさまりきらないものもある。たとえば、「stupid」と「brilliant」において、基準を下回る（一般常識的に「brilliant」とは言えない）XとYを比較するような場合である。このとき、スケール上でより典型に近いXを「XがYより stupid である」と表現できるが、スケール上の右側にある（「stupid」度の低い）YがXより「より brilliant である」とは普通言わない。すなわち、「stupid」と「brilliant」は双方向性の一本のスケールを構成するのではなく、それぞれの程度性を表す日本のスケールが一般常識的なイメージを基準として逆方向に伸びていると考えるべきだとされている。

なお、日本語の場合、「素直／わがまま」「愚かだ／利口だ」の程度評価を行う際、一般的に素直と言えない二つの事態XとYの比較において、より典型に近いXを「よりわがまま」とできるのみならず、より典型から遠いYを「より素直だ」と表現可能である。したがって、日本語において心理的な程度評価を行う概念は、むしろ、固定的な反意語を持たない語の組み合わせであり、Pの反意語は「Pでない」であるような「悲しい／うれしい」「頭が痛い」のようなものがそれに該当するであろう。

### 2・1・3 Linguistic grading

言語的程度評価とは、程度評価をするスケール上でより程度が大きいか小さいかを示すが、それ自体が実質的な概念を持たずスケールを設定するための基準や典型を考慮しないものとされている。サピア（sapir1944）はその例として「more」と「less」をあげる。そして、これらは古典的かつ基本的なスケール上の位置を表すペアであると同時に、事態の関係を程度の大小で関係づけることのできる語句であり、形容詞の原級に対する比較級の「-er」や最上級の「-est」などもその関係を明示する形式であるとする。

日本語では程度性の関係のみをスケール上の位置として示す形式がなく、似たものとしては、副詞として働く「より」、接尾辞の「-寄り」「-気味」「-め」などが上げられる。ただし、「より」は被修飾の程度性述語の程度がより大きいことを示して、基準から離れることをあらわすことを基本的性質とする。その意味では、「more」や「less」のように方向を特定しない。日本語では「程度

が大きい／小さい」「度合いが高い／低い」など、実質的な概念を持つ形容詞を使わずに関係をあらわすのが難しい。

さらに、言語（単語）の形式として明示的な変化はないが、共通する意味を持つ単語の組み合わせによって作られたグループがスケールを代替する場合がある。ある状態に程度性のスケールを設定するのではなく、近接した概念による2語、3語、4語などのグループによってスケールを構成する場合である。たとえば、距離、容量などをあらわすメジャーメント語句「大小」「高低」「遠近」などの組み合わせがある。3語の場合は、真ん中、すなわち「よい、まあまあ、悪い」のうちの「まあまあ」はスケール上の一点であり、「悪い」と「よい」のいずれの範囲（領域）に入らないことを示す区切りの表示になるため、それ自体が程度性を持つことはない。さらに、「暑い／暖かい／涼しい／寒い」などの組み合わせが4語のパターンとなる。アンケート調査に用いられる程度副詞はこのタイプと考えられる。

### 2・1・4 形式を持つ主観性

これらの説明を通じてサピア（sapir1944）は、程度の大小やスケールを考えるときの注意点を挙げている。その一つは、すでに示したような「many（多い）」「few（少ない）」という評価が、何を前提とするかということによって左右されるため、絶対的な概念ではないことである。次に、「more」は論理的ではなく心理的な主観性を含む概念であり、「less」は論理的に客観的な関係を表す概念であるとの指摘もある。これは、より程度の大きい位置にあるものが相対的に上位であるという感覚を伴うということである。さらに、二つの対照的な概念（状態）の中間に位置する部分について、それをどのようなものかをあらわすことが難しいことにも言及している。中間領域とはどちらでもあり、どちらでもないといった意味では双方の特徴を持たないものであり、どのような前提を設定したかによって、積極的な評価となる場合や消極的な評価となる場合が生じるからである。日本語の程度副詞において、程度スケールの中間的な段階に位置するものの意味の規定が難しいことも、同様に考えることができよう。

## 2・2 程度評価スケールの種類

### 2・2・1 一方向性スケールと双方向性スケール

前節で確認した程度性のあり方を、程度スケールの用い方という図式から改めて整理しておく。まず基本的なスケールとして（1）がある。これは、スケール上の任意の点X Yを互いに比較の対象とすると、X（Y）を基

準にして程度の大小関係が表示される。程度の実質的な関係はどちらを起点にしても変わらない。また、XかYのいずれか一つだけの程度の大きさを測る場合には、「small」と「big」を分ける基準との比較から状態 (small/big) とその程度の大きさが表示される。論理的、言語的程度評価はこれがもとなる。

(1) smaller ←—————→  
small ——— X ——— + ——— Y ——— big  
—————→ bigger

ただし、この基準の位置は固定的ではなく、「big」の度合いをはかる場合と「small」の度合いをはかる場合では異なる。「大きくない」が「小さい」をあらわすとは限らないからである。背の高さや2色の境目を指摘することを想像するとわかりやすい。このようなときには(2)のようなスケールとなる。

(2) shorter ←—————→  
short ——— ..... ——— tall  
—————→ taller

「…」の部分は基準の周辺に存在する領域であり、スケールの両極となっている語の意味の性質からたとえば、色のブレンドや明度の変化のように「どちらでもある」場合と、背の高さに対する判断のように「どちらでもない」場合があるとされる部分である。

(1) と (2) のタイプは一本のスケールが二つの極を持つ双極性の程度スケールとなっているが、次は一方方向性 (一極性) の2本の程度スケールのセットによって構成、程度評価されるタイプである。

(3) more stupid ←—————→  
stupid ——— ——— intelligent  
—————→ more intelligent

このスケールの場合、二つの語が示す対立的意味に関連はあるが、全体として一本のスケールを構成することではなく、二つの概念を判断する基準の周辺には断絶がある。(2)(3)は心理的程度評価のタイプである。

## 2・2・2 クルース (Crues1986) の程度スケール

ただし、クルース (Crues1986) によれば、「Pでない」が「Q/R/S…」の複数の可能性をもち、対立的意味が固定的でないものについては、上の図のような必ずしもスケールを逆方向に設定するのではなく、いくつも並んだスケールの中から最適なものを選択して乗り換える場合のあることが指摘されている<sup>註1</sup>。定義しにくい色を表現するときや対象に最適な属性を与えようとするとき、複雑な心情をあえて説明しようとするときなどを想定すればわかりやすい。つまり、複数のスケールを見渡したうえでスケール選択を行っているということになる。

これをもとに、クルース (Crues1986) は双方向の1本のスケールによって程度評価するものと、それぞれ逆の方向に向かう2本の程度評価スケールを用いるものとを提示した。1本のスケールである状態の尺度を示すタイプは論理的な程度評価を行うものである。

このとき、スケールの両端を典型とする反意語が基準をはさんで棲み分けているような組み合わせによってスケールが構成されていると心理的程度評価を行うものとなる。

(4) —————→  
How long ~  
(5) ←—————→  
Short long

さらに、(4)のスケール上で尺度となる状態を表す語句が互いに均衡した関係で配置されて棲み分けているが、評価する視点によって配置はそのままに、絶対的な尺度との間では関連性を失うタイプがあることが示されている。これは対象となる事態はどのような基準 (前提) で比較するのかによって評価が異なることを意味する。

(6) 温度 (低) ————— (高)  
冷たい / ぬるい / あたかい / 熱い  
(サピアの言語的程度評価)  
冷たい ←—————→ 熱い  
cool / warm cool / hot

論理的程度評価や言語的程度評価の場合、基本的には相対的な関係を表すのみなので、このような主観性が生じる。

## 2・2・3 日本語の程度副詞の程度スケール

日本語の程度副詞は、表す程度の大きさをもとにした単純な分類がされず、程度副詞が修飾する語句によってその特性を分類する傾向にあったのは冒頭でも述べた。では、なぜ表す程度の大きさによる分類がなされないのか。それは、それぞれの程度副詞の意味が独立した実質的な概念を持たないことに要因がある。

クルース (Crues1986) の (5)(6) のスケールで見たように、基準の設定や発話主体の主観の持ち方によって対象となる事態の程度評価は異なる。ある作品の出来を「よい」と見るか「悪い」と見るかだけでなく、「{非常に / かなり / すこし / まあまあ} よい」と見るかが異なる。さらに、同一の対象に対するある人の「少しよい」と他者の「あまりよくない」という評価が共存する。ただし、(6)のスケールは、サピア (Sapir1944) の言語的スケールの4語タイプのように全体を俯瞰的に見れば、程度評価スケールに並ぶ尺度語句の配置が逆転することはない。



日本語の程度副詞に程度の大きさや程度を特定するような概念が含まれているとすれば、複数の程度副詞によって構成された言語的程度評価として成り立っている点にあらう。「ちょっと<かなり<とても」のように、多くの人が共通して設定している程度の大きさの序列がそのまま程度スケールを代替していると考えることが出来る。対象となる事態の程度の大きさは、スケールを構成する語句の意味と照らし合わせてどの語句の表すレベルにあるかを位値づける。なお、程度スケールを構成する程度副詞は、程度スケール上の一定範囲を分け持ち、語の意味が程度スケールの目盛りを代替しているが、語句間の区切りは明確ではない。その意味で、程度副詞の意味は相対的なものであり、非実質的概念である。

### 3. 程度副詞分類への視角

#### 3・1 程度副詞分類の難しさ

形容詞を修飾する場合、工藤浩(1983)<sup>8)</sup>が指摘するように、「非相対的な状態」(点的な状態については修飾できないとされる。たとえば、「同じ」「ど真ん中」などがそうである。これらの点的な状態は非段階語であり、このような語句を修飾できるものは程度副詞としての性質が異なると述べられ、先行研究では次のような指摘がなされている(工藤 1983、中山 1997、林奈緒子 1996<sup>9)</sup>)。

- ①純然たる否定形式とは共起しない。
- ②聞き手や自らに向かって動作や行為の実現を働きかける文末形式とは共起しないかしくい。(命令・依頼・勧誘など)
- ③疑問の形式と共起しにくい程度副詞がある。

また、程度副詞には、「ーが[程度副詞]ある」という表現が可能な量的概念をも内包する程度副詞(「量的程度副詞」)と量的概念を内包せず、感情や感覚の動詞、主体のあり方の進展的な変化を表す動詞、性情動詞、量的関係の変化を表す動詞など、切り取った状態のあり方に程度性のあるものに限って修飾可能な程度副詞(「純粋程度副詞」)とがある(森山卓郎 1985)<sup>10)</sup>。すなわち、動詞の場合は、動作量・主体量・対象量・頻度・回数といった量的程度を読みとっての程度修飾と、動作による結果としての移動・変化変動量といった結果量を捉えた程度修飾が想定できる(仁田義雄 2002)<sup>11)</sup>。量的概念を内包しているかどうかについては、次のようなテストを用いて分類されている(森山 1985)

(7)\*たいへん歩いた。／たいへんたくさん歩いた。

(8)かなり歩いた。(いずれも森山 1985 より)

渡辺実(1990)<sup>12)</sup>では、程度副詞の出現する文のタイプや判断構造、評価のあり方などから次のように分類さ

れている。

(9) 表1—出所：程度副詞の体系(渡辺 1990)

		比計 較量	判 断 構 造	評 価	表現 性	量	
発 見 系	とて も類	×○	発見	±	驚嘆	大	評 価 系
	けっ こう 類	×○	望外 発見	+	脱 懸念	(大)	
比 較 系	多少 類	○○	潜在 比較	— ±	反期 待	小	
	もっ と類	○×	比較	±	吟味	大	

このほか、被修飾語句の特性や主観の入り方などの考慮を加えた、より詳細な条件による分類が試みられている。これらでは、それぞれの程度副詞がある要素で全く同じふるまいを示しつつ、他では同一のふるまいを示すといった状況がより詳細に示される。結果として(9)の渡辺表の全体あるいは部分的な詳細バージョンとなり、多様な程度副詞があることを示されるが、それ以上の意義を見いだしにくくすることとなる。

#### 3・2 程度副詞の程度評価

##### 3・2・1 尺度表現としての適格性

程度副詞がサピア(Sapir 1944)の言語的な程度評価を行い、程度スケールを構成するグループであることは既に見たとおりである。したがって、より典型的な程度副詞であるかどうかは、その語句がおこなう程度評価のあり方によって確認できる。程度スケールを構成しないものは程度副詞としての度合いが低くなると考えることができる。

たとえば、ある心情を強調することや状態や動作の大きさを増幅することによる程度表現はスケールを必ずしも必要としない。また、概括量の副詞は最大量を基準にして接近の度合で表現をすること、量の副詞は数値的段階で表現することがあり、この点では程度副詞的側面を持つ。ただし、それらの副詞は互いにスケールの段階を分け持って体系的に序列化されているわけではなく、特定のある状態を指し示して互いに独立している。したがって、基本的にはいくつかの表現が並存することも、意味の範囲をわけあうことも、意味の範囲が重なり合うこともない。

ここで、ある状態の評価用語として用いられている程度表現用語を見てみよう。織田揮準(1970)<sup>13)</sup>における

程度量副詞のリスト、竹内晴彦 (1991) <sup>14)</sup>において考察されている「adv.よい」「adv.良くない」の形式に用いられる語句、佐藤哲身・石川裕 (2001) <sup>15)</sup>における考察対象、「adv.うるさい」「adv.うるさくない」という形式に用いられる 100 語を参考にする。これらの研究では、使用頻度やその語句が一般にどのようなランクを表示するものとして認識されているかなどから、程度表現用語または尺度感覚を表す用語として適切性が検討されている。これらの研究から被修飾の語句が「adj.ない」となっていない程度表現を取りあげ、さらに、その中から辞書等で見る限り一語として認定しにくい「ほんのわずかに」「これ以上ないほど」「どちらかといえば」などや、他の助詞や接尾辞を伴った「ちょっとだけ」「すこしでも」「それだけ」といったものをのぞいた語句を以下にあげる。

#### (10) 程度評価用語・尺度感覚を表す語彙群

あまり、あまりに (も)、ある程度、いい加減、いくぶん、いくらか、いささか、いたって、いちじるしく、いちばん、いやに、うんと、えらく、大いに、おそろしく、おもいきり、格段に、かなり、かろうじて、強烈に、極端に、極度に、きわめて、けた違いに、けた外れに、けっこう、ごく (ごくごく)、心持、ことに、ことのほか、最高に、至極、実に、若干、十分、少々、ずいぶん、すごく、少し、すこぶる、すさまじく、ずっと、すばらしく、絶大に、そうとう、そこそこ、存外、たいそう、だいぶ、たいへん、多少、ただ、断然、段違いに、ちょっと、ちょっぴり、特に、特別に、とてつもなく、とても、とびきり、とほうもなく、とりわけ、とんでもなく、なかなか、ばかに、抜群に、はなはだ、はなはだしく、比較的、非常に、ひときわ、ひどく、べらぼうに、法外に、まあまあ、まことに、まずまず、むやみに、めちゃくちゃ、めっぽう、猛烈に、もっとも、ものすごく、もろに、やけに、やたら (に)、やや、よけい、よほど (よっぽど)、わずかに、わりあい、わりに (わりと) …94 語

考察を経て、織田 (1970) において「程度量表現語彙の意味づけ調査の対象語句とされたもの、佐藤・石川 (2001) の考察の結果から程度表現用語として適格であるとされたものは以下のとおりである。

#### (11) 佐藤・石川 (2001)

まったく※、ほとんど※、すこし、やや、わずかに、あまり※、それほど※、いくらか、多少、たいして※、わりに、比較的、だいぶ、かなり、そうとう、とても、たいへん、非常に、すごく、きわめて、ひどく

#### (12) 織田揮準 (1970)

非常に、すごく、たいへん、とても、かなり、だいぶ、わりに、やや、多少、少し、わずかに、どちらかといえば、あまり※、どちらともいえない、少しも※、全然※

(※は否定と共起するもの)

この一覧を見ると、これまでの研究で程度副詞として取り上げられてきたものの程度副詞らしさの度合いの高さがうかがわれる。

### 3.2.2 程度評価と程度スケールの関係

(10) の語群に挙げられている語句には、典型的な意程度副詞以外に、少なくとも次の三つのタイプが含まれる。

まず、既知の他の事態と比較して優劣を評価する「いちばん、格段に、桁外れに、ずっと、断然、段違いに、とりわけ、抜群に、ひときわ、もっとも、よけい」などである。次に、心情や状態を強調する増幅タイプと特殊性を強調して示すタイプ、許容範囲を超えることを示す批判的評価タイプがある。たとえば、「あまり、あまりにも、いたって、いちじるしく、おそろしく、かろうじて、極端に、強烈に、極度に、きわめて、ことに、ことのほか、最高に、すごく、すさまじく、すばらしく、絶大に、特に、特別に、とてつもなく、とんでもなく、ひどく、ばかに、べらぼうに、法外に、猛烈、ものすごく、もろに、やけに、やたらと」などである。さらに、「ある程度、いい加減、そこそこ、比較的、まあまあ」のように、自己基準や常識的基準自体を示すタイプがある。これらは程度評価スケールを必ずしも必要としないものであり、程度修飾の質を異にする。

上にあげた程度表現には、他の副詞や品詞が程度副詞的機能を持つようになったものも多い。他にも、「ほど」「くらい」等を用いた程度副詞節 (句) や「まで」を用いてスケール上で該当範囲や到達点を示すものがある。さらに、「…したら (…すると) ーする」のように条件節を用いて、ある行為や作用の分岐点を示すものがある。これらはスケール上で該当する分岐点を取り出して示すというものである。したがって、相対的な程度限定ではなく、取り立てに近いとも言える。

このように、程度表現には程度スケール自体になりうるもの、程度性を持ったもの (程度スケールをなしているもの) を別スケールに当てはめて位値や範囲を指定するもの、程度スケールを使用しないものが含まれている。

### 3.2.3 程度副詞分類における程度スケールの意味

程度副詞自体が構成する程度スケールは、状態のレベ

ルの評価においては有効であり、評価主体の評価をそれ以外の人が理解し、共有するためのツールとなっている。また、程度副詞の程度評価と分類を考えるには、程度スケール自体の問題と程度スケールの使い方の問題を考慮する必要のあることがわかった。

程度副詞は先にも述べたようにサピア（Sapir1944）が示した言語的尺度の一種である。それゆえ、アンケート調査が可能になる。ただし、実際には基準とともに配置されたことばの序列の体系を共有しているに過ぎない。実際、程度副詞によって表される程度情報が示すものは、対象となる事態の状態の具体的な程度にはならない。対象となる事態の状態を確認しているときにのみ、「それへの主観的評価が程度スケールをつくることばの序列の中のどれで表されていたか」を知ることができる。さらに、発話主体の程度スケールのだいたいの姿（基準が高いか低いか、どのような前提をもっていたかなど）が想定できるとどまる。このように、程度副詞が表す情報というものは、程度がどれくらいかという客観的な確定性はきわめて低く、発話主体が当該の程度性についてどのような基準と尺度感覚を持っているかを示す指標になるものといえる。したがって、状態への主観的な捉え方を探るアンケート調査においては、十分な有効性を発揮するものとなる。

なお、程度副詞自体が構成するこのような程度スケールにおいて、それぞれの程度副詞がそのスケール上に占める位置（たとえば、程度小、程度中、程度大のどの位値になるかなど）によって、（9）表のように性質も異なる。そのため、程度副詞の機能や性質においての相互の線引き・棲み分けが難しい。これは、程度スケールを構成する程度副詞の配置によって、基準となるものやそれとの距離が異なるためと考えられる。その意味で、語句の構成によって語彙的に程度スケールを構成する程度性述語などの言語的程度評価とは異なる性質を持つものであることがわかる。

これをふまえて、再度、（9）表を見直すと、「判断構造」「評価」「表現性」は「発話主体が発話時に持つ前提との関係」のことと理解でき、「比較／計量」を「基準」の相違と考えれば、前提と基準が程度副詞の意味を決める基本的な要素と位置づけられる。これは、前に見てきた程度スケールと程度評価のあり方を確認させるものである。この基準と前提の内容と組み合わせを基にいずれかのスケールを用いることによって、程度評価が行われている。

発話主体の設定する基準は評価の基準であり、対象となる事態への価値付けを明らかにするものである。また、それを通して発話主体の評価や判断の前提が明らかにな

る。これに対象となる事態の程度性に照らしてみると、どのようなスケールを発話主体が設定しているのかということやその判断のプロセスが分かる。

#### 4. 程度副詞の意味の構造とメカニズム

##### 4・1 程度限定のための基準と前提

以上をもとに、程度評価の心的プロセスを分解していくつかのタイプに分ける

まず、程度限定の基準とは、スケールを設定して程度を計る際の起点となるものとする。具体的な比較対象を必ず必要とするかどうかによって、これまでの研究で示されてきたようにそれぞれの程度表現が、以下のように大きく二種類に分類できる。

(13)表2：比較対象の必要性

具体的な比較対象	必ず必要	
	必ずしも必要としない	当該状態の存在が認められない一種の0点 一般常識的に誰もがそうだと認める普通の程度

「XはYよりP」といった構文に出現して常に具体的な比較対象を比較の基準として設定する必要のあるタイプは、「Xの方がPだ」のような基準が隠れているように見えても、「何よりそうなのか？」と問われれば、必ずその答え（基準となるもの）が用意されている。

具体的に比較対象を必要としないタイプの基準では、「0点」と「一般常識的な普通の程度」がある。0点が基準になるものは、「P」に対して反対の意味を持って対になる語句が「Pない」しか存在しない場合である。たとえば、「頭が痛い／頭が痛くない」といった組み合わせでは、どれくらい頭が痛いのかの基準が「頭が痛くない（0値）」状態をもとに一方方向性のスケールで示され、このときの基準が「当該状態が認められないような0の地点」である。これは論理的な程度評価のタイプである。

また、車のスピードを程度評価するような場合を見ると、速度は程度ではなく、0値を基準に客観的な数量スケールで示すものであり、走り出した瞬間からスピードメーターは動き出し、時速Nキロという値で随時表される。これも0点が基準である。しかし、その車がどれくらい速いかについては車の速度とは別に表される主観的な評価である。多くの人が一般常識的に速いと感じるスピードが基準となって、「かなり速い」「とても速い」などと示され、このときの基準は「普通程度」「まあまあのレベル」などで表されることもある。これは、「速くない」は「頭が痛くない」とは異なり、反対の意味でありつつ意味の重なる「遅い」という語句を持っていることから

もわかる。程度スケールとして「一般常識的な普通の程度」を基準値として考える場合である。こちらは心理的な程度評価のタイプとなる。言語的な程度評価はどちらにも表れる。

#### 4・2 程度限定における「前提」

さらに、「一般常識的な普通の程度」にもさまざまある。すべての人が「速い」と認定する基準を客観的に決められるわけではない。何が「速い」のかによって発話ごとに異なる。具体的な速度を問うものではないため、個別のできごとにおける程度差は問題とならない。また、服部匡 (1996) <sup>16)</sup> が示すような飛行機の安全性についての程度評価において、「飛行機は高度に安全であって普通」といった適格性基準が存在するものがある。これは、危険と対比して得られる「安全」のあり方に加えて、期待値 (求められるあり方) である。いずれも発話主体がどのような予測をもっていたかということを明らかにするが、程度の大小を直接限定しないという点で、基準と区別して発話の前提 (求められるあり方) とする。「一般常識的な普通の程度」は、基準に対して発話主体の評価が入った時点で客観的基準にはなり得ないので、前提や期待値として考慮する必要が生じる。この前提は程度の大小を限定するためのものではなく、発話主体がその対象となる事態について肯定的評価をするか否定的評価をするかをわける区分となるものである。

(14)表 3 : 基準の種類

具体的な比較対象	必ず必要		
	必ずしも必要としない	当該状態の存在が認められない一種の 0 点	
		一般常識的な普通の程度	適格性基準 発話ごとの基準

近年用いられる「普通においしい」は、「普通」に期待値としての求められるあり方があるため、それを満たすことが程度としても十分であることを示すことになる。

#### 4・3 程度表現が伝えるもの

##### 4・3・1 程度スケール上の位置関係の含意

以上のような程度副詞が表す程度情報は、いずれも相対的な関係について述べるものであった。したがって、それ自体単独では実質的な意味を持たないうえに、程度表現がなくても理解に支障をきたすとは限らない。では、そのような程度副詞を用いて程度を限定したり評価したりすることのどのような意味があるのだろうか。これについては、情報を伝達してコミュニケーションをとるという観点から検討される必要があろう。

基準からの距離によって程度の大小を表していた程度副詞グループが表す、程度の大きさすなわち基準からの距離は、既に見たように客観的な数値に替えられるものではない。したがって、発話主体と受け手の間で共有されるものは、程度の大小ではなく程度副詞の言葉の序列 (並び方) となる。すなわち、ある対象の程度についての評価が、ともに「かなり」で表現されてランクの一致が見られたとしても、そのランク自体が同等かどうかを簡単に断定することはできない。程度スケール上での基準からの距離が一致しているとは限らないからである。程度スケールとは、先にも述べたように、基準となる点を起点として本来アナログ的に増大する状態のあり方を、程度副詞による言葉の序列によって部分ごとに対応させたものである。対象となる事態に対応可能なさまざまな状態を表す表現 (語句) の集合の中での序列を程度スケールへ乗せ替えたものといえる。人によってその状態の切り取り方も異なり、分割した数も異なる。さらに、最大級の程度を表す状態の設定も、基準となる状態のあり方も同一ではない。つまり、同一事象についての程度評価の相違はその事象に対して設定した個々の程度スケールの相違を表している。その意味では、デジタル化されているように見えるアナログ方式である。

その意味で、程度スケールの端を指向する評価の場合は分かりやすい。当該集合のなかの序列において両端のランクに位置するものは程度スケールの全体像を必ずしも共有する必要がなく、基準への依存度も小さくなるため、意味の相対性が薄まる。中間段階の序列に位置するものは、基準や序列の共通理解を通してなら共通理解可能だが、いわば、スケールの全体像と照らし合わせて情報を交換する必要がある。したがって、程度スケールの端のランクにないものは、スケールの起点である基準とスケールの端をにらんだ程度評価が行われていると考えなければならない。そもそもランクの設定はおおざっぱなものである。そして、おおざっぱであっても特に問題が生じないのが程度評価のあり方である。おおざっぱでは困るのは確定的な指示情報や客観的な情報を求めているときであり、程度副詞は基本的にこのような情報提供を不得意とする。これが、命令・依頼文と共起制限となっている。

このことを示しているのが、アンケート調査での評価用語である。アンケート調査では、あらかじめスケールの全体像を提示した上で、それに当てはめるという形式をとる。多くの場合、そこでは「非常に／とても」「かなり／だいぶ」「少し／やや」などの程度副詞によって段階が振り分けられる。一般常識的基準を評価の基準点におく場合は、「普通／まあまあ」など特定の語句がもちいら



れることもある。アンケート調査自体が、本来、自分の持つ基準や求めているあり方に対してプラス評価なのかマイナス評価なのか、基準からどれくらい離れていたかを示すことを求めるものである。したがって、「けっこう」や「ずいぶん」などの期待値に対する評価を表現性として持つものを敢えて用いる必要はない。もし、それらを用いて評価させるなら、発話主体が対象となる事態の基準との異なりを実感としてどう受けとめたかを問うものとなる。これは対象となる事態そのものへの評価とはならないため、アンケート調査の趣旨に反するものとならざるを得ない。そして、「けっこう」や「ずいぶん」のようなタイプは、程度スケールを構成するものとしての適格性で劣るものとなる（織田 1970、佐藤・石川 2001）。

#### 4・3・2 程度副詞の序列における矛盾

前提を用いる程度表現では、前提自体の共有がなければ発話主体の程度評価を理解することは出来ない。できるのはおおざっぱなスケール上での位置と前提に対してどう評価したのかという判断のあり方の共有から逆算した、発話主体が持っていた前提のあり方である。

ただし、程度表現用語の尺度に関する考察の中には、「たいして…ない」「さほど…ない」が「多少…」「少し…」などとほぼ同等の段階を表すという結果が出ていることが示されている（佐藤・石川 2001）。これは、ことばの意味による序列どおりに「少しおもしろい」→「どちらともいえない」→「あまりおもしろくない」の順で、おもしろさが小さくなるわけでは決してないことを意味している。最初の期待度によって「少しおもしろい」も「あまりおもしろくない」も表裏一体の評価であるということになる。同様のことは小野寺典子（2002）<sup>17)</sup>においても指摘されている。たとえば、「そう思う」の度合いを5から7段階に分けて程度表現を用いた形式で尋ねるときの考察結果に現れている。「多少そう思う」「多少そう思わない」といった弱い肯定表現と否定表現について、調査者に肯定と否定の度合いを尋ねると、それぞれ前者は否定、後者は肯定にずれる傾向を見せるとのことであった。小野寺（2002）では、これがそれぞれ「基本的にはそう思わない（そう思う）が」といった逆方向のスタンスを内在したものであると分析されている。

また、程度副詞に修飾されない「おもしろい」と程度副詞によって程度が大きいことを示されている「かなりおもしろい」を比較すると、後者の方が程度の大きさが小さく感じられる場合がある。それは、前者がスケールのある一定以上の範囲をすべて含むのに対して、後者は程度が極大から一定の距離を差し引いた部分を指し示すものであることと関係する。程度副詞を用いれば最高評

価以外是否定的ニュアンスを含んでしまうが、限定しない方は否定的ニュアンスを含まない。一定レベルに達した時点でそれ以上の評価をしないのが無修飾である。この時の基準は「おもしろくない」や「普通」であり、これらの対立関係でのみ捉えられている。もちろん、最高評価であることを積極的に示す場合には程度副詞を用いることが効果的になる。これらは言語的程度評価の性質とも言える。

#### 4・4 程度表現の程度評価の方法別分類

これらのことを元に程度表現を仮に分類するとすれば、分類のポイントは次の通りである。

##### ①スケールを設定する基準

…具体的な比較対象のみ

…ゼロ点（極小値、典型的あり方）

##### ②基準点からの程度限定のしかた

…遠ざかりタイプ、接近タイプ<sup>注2</sup>

…ポイント間の距離タイプ

…ポイント間の距離に言及しないタイプ<sup>i</sup>

##### ③スケール上にある判断の前提となるポイント

…具体的な比較対象のみ

…ゼロ点（極小値、典型的あり方）

…当該自体について妥当だと判断される値  
（適格性基準）

上のポイントをもとに整理すると以下ようになる。

(15)表4：程度評価の相違による分類

①基準	②程度限定	③前提	
具体的な比較対象	ポイント間の距離に言及		a
	ポイント間の距離に言及しない		b
ゼロ点	遠ざかりタイプ	ゼロまたは極小値	c
		適格性基準	d
	接近タイプ	典型的あり方	e

結果として、程度スケール自体を程度副詞が構成する場合が（b）（c）（d）と、状態の程度をあらわすスケールに基準や評価の分岐点をかき込むタイプ（a）（e）は、前提と照らし合わせた評価である。程度スケールを不要とするタイプは、状態の程度を表すスケールの有無にかかわらず、前提も基準も設定しないことから（c）（e）に現れることになる。それぞれの語句の表す程度の大きさの意味も、スケール上の位置をもとに、このような程度限定のあり方によって分類することができる。

この分類は、程度副詞の情報の主となる、発話主体の前提と対象となる事態への優劣の評価基準設定に注目したものである。程度副詞が言語的尺度の一種であることをふまえ、程度性の概念の分類に立ちかえたものであ

る。スケール設定、基準の位置づけ、前提の有無に注目することにより程度評価するものを一括し、程度副詞の周遍的な程度表現をも分類に組み込むことが可能となる。

## 5. むすび

このような手順でもって得られた程度情報を、伝達して共通理解することに求められているものは何か。程度評価のあり方によって情報の性質が異なるということは、伝えたいことの趣旨が異なることであり、伝達の目的も異なることを意味していよう。

また、程度表現が多様化することや他品詞からの参入による程度表現語句の増加は、既成の語句では表現できない内容の出現を示している。さらに、既成の語句において「ちょっと」が表す婉曲の意味を見ても、情報を伝達するにおいてコミュニケーション上の機能を考慮せざるを得ないことは明らかである。しかし、程度表現を用いることによって評価主体と聞き手を含めた他者がどのようなコミュニケーションを目指すのかという側面から程度副詞を分類したものは、管見する限りではこれまでにない。本来曖昧で大ざっぱな程度副詞による情報の伝達にどのような意味があるのかの捉え方として、その語の行う程度評価の性質のみならず、それを使用する目的を考察することも重要となろう。発話主体の程度評価を通して他者が知ることのできるものは、対象となる事態を評価する際の前提と結果としての優劣の判断である。程度副詞の主観性は基準・前提・スケールの各所に存在して重層的であり、この主観性にも注目すべきである。

## 注

1. クルース (Crues1991) では、反対語の組み合わせのタイプとして polar opposition, overlapping, equipollent, privative、の 4 つが示されている。

2. 具体的な比較対象を必ずしも必要としない程度副詞は、基準から遠ざかる距離によって程度の大きさが割り当てられるタイプである。これに対して、具体的な比較対象を必ず必要とする程度表現の程度限定は、比較の対象間の相対的な関係を表すため、程度の大きさの表示はない。前者のような程度限定の考え方は、ケネディ (Kennedy2001) にも「基準となるポイント+距離」として示されている。

①My watch is faster than your watch is slow.

②The Cubs are as old as the White Sox are young.

ケネディは、比較構文において二種類の程度性述語が登場する上のような例が自然であることをあげて、基準からの距離同士の比較が行われていることを説明する。

①の場合、the degree which my watch is fast < the degree which your watch is slow として、それぞれの程度の大きさ (基準からの距離) 同士を比較している。(13) 例も、基準点 (平均年齢) からの「若さ (平均年齢の低さ)」「年とっている度合い (平均年齢の高さ)」をそれぞれ距離として換算して比較したものである。一見別々の方向に向かって見える程度性のスケールが基準点からの距離を表す同方向に伸びる二本の程度性スケールに置き換えられている例といえる。すなわち、基準からのぶれ幅の比較になっている。

## 参考文献

- 1) 中山恵理子：程度副詞分類の試み，阪南論集，31-3，75-86
- 2) 川端元子：広義程度副詞の程度修飾機能——，日本語教育，101，51-60，1999
- 3) Lyons, J. : Semantics I , Cambridge: Cambridge University Press, 1977
- 4) Sapir, E. : Grading, a study of Semantics, Philosophy of Science, 11, 93-116, 1944
- 5) Crues, D. A. : Lexical Semantics, Cambridge University Press, 1986
- 6) Kennedy, C. : Gradable Adjectives Denote Measure Functions, not Partial Functions, Studies in the Linguistic Sciences, 29(1), 65-80, 2001
- 7) 八木孝夫：程度表現と比較構造，大修館書店，1987
- 8) 工藤浩：程度副詞をめぐって，副用語の研究，渡辺実編，明治書院，176-198，1983
- 9) 林菜緒子：意味素性による程度副詞の記述，筑波大学応用言語学研究，3，13-26，1996
- 10) 森山卓郎：程度副詞と動詞句，京都教育大学国文学会誌，20，25-36，1985
- 11) 仁田義雄：副詞的表現の諸相，くろしお出版，2002
- 12) 渡辺実：程度副詞の体系，上智大学国文学論集，23，1-16，1990
- 13) 織田揮準：日本語の程度量表現用語に関する研究，教育心理学研究，18-3，166-176，1970
- 14) 竹内晴彦：ファジィ評定法による程度表現用語の意味計測，計量言語学，17-8，365-376，1991
- 15) 佐藤哲身・石川裕：騒音のうるささの程度表現語に関する実験—北海道における ICBEN の国際共同研究—，北海学園工学部研究報告，28，345-360，2001
- 16) 服部匡：程度副詞と比較基準—「多少」「少し」を中心に—，同志社大学学術研究年報，47-4，1-16，1996
- 17) 小野寺典子：調査研究ノート「非常に」と「かなり」で異なる回答—国際比較調査における選択肢表現の検討，放送研究と調査，52(1)，62-75，2002

(受理 平成 24 年 3 月 19 日)